

国際医療福祉大学大学院 公開講座・乃木坂スクール  
「前例を超える・前例を創る～」(2021年6月10日)

小児科医から出発

途上国の母子保健の道を切り拓き、そして、いま  
フィールドで学んだグローバルヘルスの魅力



中村安秀

日本WHO協会理事長・大阪大学名誉教授

(国立国際医療研究センター理事・国立看護大学校特任教授)



## 医療は文化である

インドネシアから帰国後、1990年代に東大病院小児科で「国際外来」を開設。英語による母親学級を東京で初めて開催。外国人妊婦と日本人父親というカップルが多かった。講師を務めたのは、米国人看護師とベルギー人助産師であった(1995年)。

1977年東京大学医学部卒業。

都立府中病院小児科、東京都三鷹保健所などを経て、

86年からJICA母子保健専門家としてインドネシアに赴任。

90年にパキスタンでUNHCR職員としてアフガン難民医療に従事。

東京大学小児科講師、ハーバード大学公衆衛生大学院研究員などを経て、99年より大阪大学大学院人間科学研究科ボランティア人間科学講座・教授。

2017年甲南女子大学教授を経て、現在、日本WHO協会理事長。

国際母子手帳委員会代表、国際小児科学会理事を務める。



# 本日の流れ

1. **インドネシアの村で教えられたこと**
2. **プライマリヘルスケアの魅力**
3. **世界に広がる母子健康手帳から学ぶ**
4. **プラネタリーヘルスをめざして**

# インドネシア・ティンギ・ラジャ村(1986-88)

## JICA北スマトラ州地域保健向上プロジェクト

村のヘルス・ボランティアたちと過ごす

ことば  
食事  
友だち



# ポシアンドウ (POSYANDU)

*Pos Pelayanan Terpadu: Integrated Service Post*

プライマリヘルスケアの理念に基づく地域保健活動

主役は村のヘルス・ボランティア (KADER)

健診の対象は5歳未満児と妊産婦

- ・母子保健: 毎月の体重測定
- ・家族計画: ピルの配布
- ・栄養改善: 栄養失調児指導、  
離乳食指導、  
ビタミンA・鉄剤の配布
- ・予防接種: ポリオ、BCG、  
DPT、はしか、B型肝炎
- ・下痢症対策: 経口補液の配布



ポシアンドウの受付をする  
村のヘルス・ボランティア(インドネシア)  
(住民参加 : Community Participation)



天秤棒で子どもの体重を測定する  
ヘルス・ボランティア(インドネシア・北スマトラ州)  
適正技術 (Appropriate Technology)



# お食い初め

北スマトラ州アサハン県の村で、産育習俗、通過儀礼を聞きまわっていた。子どもにはじめて母乳以外のものをあげる「お食い初め」は生後30日目。そのときの主賓は近所の子どもたち。「わが家に赤ちゃんが生まれました。みなさん遊んでやってください。」と近所の子どもたちに食事を提供して、赤ちゃんを紹介しておく。赤ちゃんが1歳を過ぎてひとりで歩き始めると、本格的に子どもたちの仲間入りをする。

儀式のなかに、粉ミルクが登場した！  
湯で溶いてスプーンで赤ちゃんに飲ませる。  
ナカムラ「いつから始まったのですか？」  
村人「ずーっと昔からさ！」

旧来の風習に外来のモノが入り混じる。  
伝統的な風俗習慣は、近代化の中で  
修飾され、受容されるものである。



中村安秀. 椰子の木陰で学んだことーインドネシアの地域保健をめぐって. メディカル・ヒューマニティ, 1993;22:50-56

# 全員死亡のドクターナカムラ

アサハン県で、英語が話せる医師は一人だけ。当初は、片言のインドネシア語を駆使したつもりで大失敗ばかりしていた。

**プロジェクト主催のプレスツアー:**

「日本から来たばかりの小児科医です」

「インドネシアでは母子保健の仕事をする」

**プロジェクトの最終目標は何ですか？**

「インドネシア、小児、乳児死亡率、減少」というつもりで、

「インドネシアの子どもはみんな亡くなってしまった」

**帰国前にはインドネシア語で講義。**

北スマトラ州健康教育局の保健所長講習会

「インドネシアの母子保健」

(インドネシア語による1時間の講義)



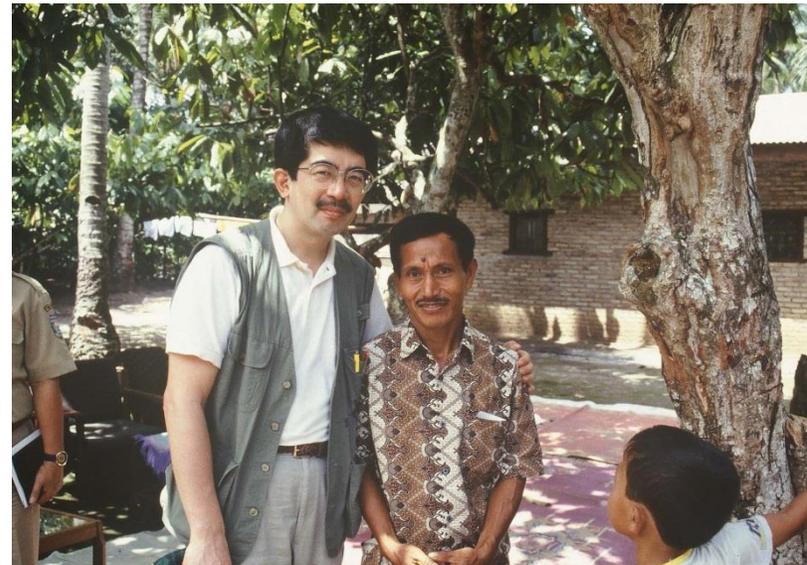
# 村 (desa: village) ではなく、 共同体 (masyarakat: community) のために

「今まで、この村では、小さい赤ちゃんがいっぱい死んでいった。だれも、好きでボランティアをする人はいないよ。ぼくだって、本当はボランティアなんかしたくないさ…

だけど、子どもたちが健康で、コミュニティの人が安心して暮らせるようにするためには、行政が何かしてくれるのを待つのではなく、コミュニティの人間ががんばらなきゃいけないんじゃないか。」(ティンギ・ラジャ村ボランティア・リーダー)

経済的には豊かではないが、  
自分たちにできることから  
始めていこうという  
コミュニティの自助自立の精神。  
医療は文化のなかに息づいて  
いることを教えられた。

中村安秀. 現代インドネシアを知るための  
60章(村井吉敬ら編著)2013年 明石書店





## 本日の流れ

1. インドネシアの村で教えられたこと
2. プライマリヘルスケアの魅力
3. 世界に広がる母子健康手帳から学ぶ
4. プラネタリーヘルスをめざして

# プライマリヘルスケア (PHC)

(アルマアタ宣言: 1978年)「すべての人に健康を！」

ベトナム戦争(1964年—75年)とソビエト連邦のアフガニスタン侵攻(1979年)の間隙を縫う、東西冷戦のデタント(緊張緩和)の時期。

とき: 1978年9月6日—12日

主催: WHO(世界保健機関)とユニセフ

## PHCの理念

- ・健康は人権である
- ・保健医療サービスの公平性
- ・ユニバーサル・アクセス
- ・住民参加
- ・自立と自決

中村安秀(2018)プライマリヘルスケアの40年の歩み. 保健の科学



インドネシアでは、PHCの理念に基づいた住民参加型の乳幼児健診(ポシアンドゥ)が全国で20万か所以上つくられた。(中部ジャワ州・1988年)

# プライマリヘルスケアの基本活動項目

1. 健康教育 (Health Education)
2. 安全な水供給と基本的な衛生
3. 食料供給と栄養 (Food supply and Nutrition)
4. 母子保健と家族計画
5. 予防接種拡大計画 (Expanded Program on Immunization)
6. 地域で蔓延している感染症の予防と対策
7. 簡単な病気やケガの適切な治療
8. 基本医薬品の供給 (Essential Drugs)



新生児破傷風の対策として、妊婦に破傷風トキソイドが接種されていた(1988年:インドネシア)

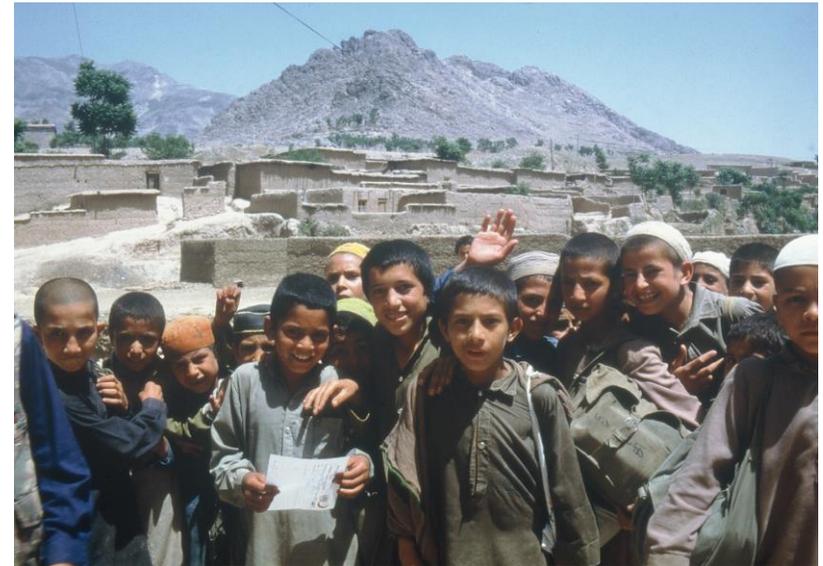
*(WHO: Report of the International Conference on Primary Health Care, 1978)*

# 平和を希求するPHC

## 第3章

The promotion and protection of the health of the people is essential to sustained economic and social development and contributes to a better quality of life and to world peace.

人々の健康を増進し、守っていくことは、持続的な経済と社会の発展に不可欠であるとともに、より良い生活の質と世界平和に貢献することです。



アフガニスタン難民キャンプで生まれ育った子どもたち(パキスタン・ペシャワール近郊:1990年)

# 世界中で保健ボランティアが活躍

HIV感染予防、母子保健などで培った平時のネットワークが役立った。世界の新型コロナウイルス感染対策の現場で、保健ボランティアが大活躍。「地域密着で住民と病院や役所をつなぐ貴重な存在だ。より強固な仕組みにしていきたい」(マヒドン大学公衆衛生准教授)

読賣新聞(2020年6月4日)

## タイ100万人ボランティア 脚光

### コロナ抑制 個別訪問で指導

タイで地域住民の健康管理を担う保健ボランティアが、新型コロナウイルスの感染拡大防止に一役買っている。全国で100万人以上が個別訪問を展開し、世界保健機関(WHO)は効果的な地域ケアの好例と評価している。

(タイ中部カセートパタナ 田原徳容、写真も)

タイ中部カセートパタナで5月27日、訪問先の高齢女性の体温を測るラチャヤさん(右)



首都バンコクから西約70キロ、梨の果樹園が広がる村で5月27日午後、保健ボランティアのラチャヤ・ゲツオさん(47)は、担当する25世帯を訪ね歩いた。最初の家では女性(70)の体温を測り、「コロナの感染者は減ってきたけど、まだ病院に行ったらダメよ」と、かかりつけ医から預かった薬を手渡した。女性は「あなたは何でも分かっている。頼りになるね」と笑った。ラチャヤさんはボランティア歴23年のベテランだ。個別訪問で地域住民の健康状態を把握するのが本来の仕事だが、コロナ感染拡大後は、感染予防の指導役として市場や銀行を巡回し、利用者に社会的距離の維持やマスク着用を呼びかける役割も担う。住民と医療機関の橋渡しをすることもあ

るといふ。村があるサムットサコン県内の累計感染者数は18人で既に全員回復し、新規感染者は50日以上出ていない。それでもラチャヤさんは「経済活動の規制が緩和され、人の出入りが活発になってきている。油断できない」と気を引き締める。

タイ全体の感染者数は3084人、死者数は58人で、

保健ボランティア 農村部など医療が行き渡りにくい地域への対応策として、タイ保健省が集落単位で配置する支援要員。1977年に導入された。公衆衛生に関する講習を受けた人が地元の10〜15世帯を担当し、1000名(約34440円)の謝礼が支払われる。担当業務は住民の健康状態把握、感染症対策、妊婦ケア、医療情報提供、HIVに関する教育など。

5月以降は1日当たりの新規感染者数がほぼ1桁で推移するなど、感染拡大は抑えられている状況だ。政府の非常事態宣言発令で夜間外出禁止などの措置が講じられているが、保健ボランティアが個別訪問で体調が悪い人の情報把握や医療機関への報告を徹底し、感染者に接触した人がいれば自宅隔離させるなど、きめ細かな対応を続けてきた効果も大きいとの見方がある。WHOも「タイの緑の下の力持ち」として以前から注目しており、新型コロナウイルスへの対応をツイッターで紹介している。

保健ボランティアは、タイでヒト免疫不全ウイルス(HIV)への感染が爆発的に流行した際、地域での予防教育に取り組み、感染者数の増加抑制に貢献した実績もある。マヒドン大学のチャヌントン・タナスガ准教授(公衆衛生)は「地域密着で住民と病院や役所をつなぐ貴重な存在だ。より強固な仕組みにしていきたい」と話している。

# COVID-19以後の活動地の様子

エンガ州の感染者数はゼロ。州をまたぐ移動制限、集会禁止などで、スタッフが村々を回り情報を伝えた。その後、Village Health Volunteer (VHV) とともにCOVID-19に関する啓発活動を開始。手洗い器具「Tippy Tap(ポリタンク、竹や枝、紐などを使って作る簡易手洗い設備)」の普及を促す。(情報提供：NPO法人HANDS寺田美和さん)



↑ 国際スタッフが海外退去したいまは、  
現地スタッフのみでVHV研修活動を継続。  
← 村で入手できる素材でTippy Tapを  
自作した。

# イタリアの病院ボランティア

## 「コロナ禍の弱者を支える、イタリア赤十字社のボランティア」

イタリアのCOVID-19への対応で重要な役割を担っているのがボランティアです。2020年7月までに、4万4000人以上のボランティアがCOVID-19関連の支援事業に参。

空港での検疫、ホームレスや貧しい人々の健康調査、非常事態宣言下での支援物資の配布、電話でのこころのケアや多言語での情報提供支援などを行ってきた。

- ・IT系企業で働く22歳のボランティア(女性): イタリア赤十字の施設で受付を担当し、陽性患者と最初に対面する
- ・弁護士の男性のボランティア: 外出が困難で薬局に行けない人々のために、医薬品を自宅へ届ける

日本赤十字社・<赤十字NEWSオンライン版>

[https://www.jrc.or.jp/about/publication/news/200721\\_006292.html](https://www.jrc.or.jp/about/publication/news/200721_006292.html)

# 日本にもあった保健ボランティア

## 愛育班活動

1934年設立。母子の健康と福祉に関して、声かけ、見守り、子育てグループの開催、健診のお知らせや手伝いなど、地域に密着した活動を行う。「愛育村」では、地域組織の支援を受け、女性の班員が活動している。

## 結核予防婦人団体

1957年、長野県結核予防婦人会が発足。現在は全国組織として、健康づくり活動、募金、講習会の開催などを行う。会員数約65万人（2020年）

## 佐久総合病院：衛生指導員

1959年、長野県八千穂村に8名の衛生指導員が任命。ハエの駆除、駆虫剤の配布をはじめ、佐久総合病院（当時若月俊一院長）と協働して、検診の普及、演劇をおこなうなど、村ぐるみの健康管理の主演となった。



# 本日の流れ

1. インドネシアの村で教えられたこと
2. プライマリヘルスケアの魅力
3. 世界に広がる母子健康手帳から学ぶ
4. プラネタリーヘルスをめざして

1986年、インドネシア  
には、まだ母子手帳は  
存在してなかった  
(JICA北スマトラ州地域保健  
向上プロジェクト)

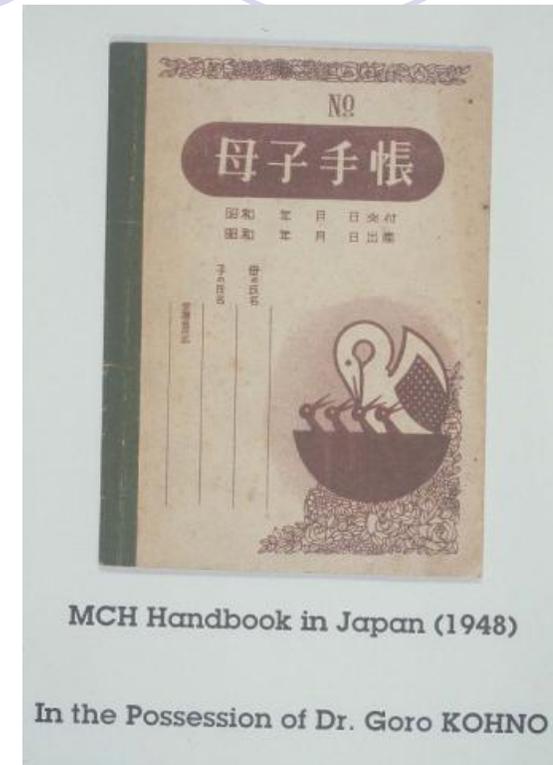
母子手帳があればありがたい  
と痛感した個人的な体験



# 母子健康手帳は日本生まれ

妊婦健診、赤ちゃんの出生記録、子どもの発育記録、予防接種記録など、母と子の健康データがひとまとめになって家庭で所有できる。

- 妊産婦、出産、新生児、小児と切れ目のない継続ケアを保障する
- 家庭で医療記録を管理できる
- 母親や父親の知識の向上や行動変容を促す
- 保健医療サービス提供者と利用者のコミュニケーションが改善する
- 利用者の満足度は非常に高い



1948年「母子手帳」発行  
世界で最初に母親と  
子どもの記録を1冊に  
まとめた

# 「母子手帳は配給手帳だった」

1948年版の母子手帳は、妊産婦と乳幼児への特別の配給のページが30%を占めていた

配給の記事

妊産婦・乳幼児に対して特別の配給をしたときは、配給責任者は必ず月、日、品目等を記入して押印して下さい。

年月日	記事	責任者氏名	印
2.27	衣料給付		
6.23	衣料給付		
7.1	衣料給付		
8.11	砂糖		
8.19	砂糖		
9.14	砂糖		
10.4	砂糖		
10.27	砂糖		
11.14	砂糖		
12.20	砂糖		
12.21	砂糖		
2.2	砂糖		
2.10	砂糖		

(15)

年月日	記事	責任者氏名	印
2.14	穀類		
2.14	「浮洲」		
3.22	砂糖		
5.1	砂糖		

(16)

← 衣料給付

← 砂糖

← ミルク7ポンド

# 戦後の乳児死亡率の減少を支えたのは へき地・農村の保健婦・助産婦だった

1929 長崎県離島にて生まれる

1945 長崎原爆投下

1947 助産婦資格を所得

1965-70 地元の離島で開業  
年間200件の出産に対応

・自転車に乗り、バイクに乗った、村で初めての女性

・コミュニティの人びとは彼女の活動に敬意を払い、彼女もコミュニティの人びとを信頼していた

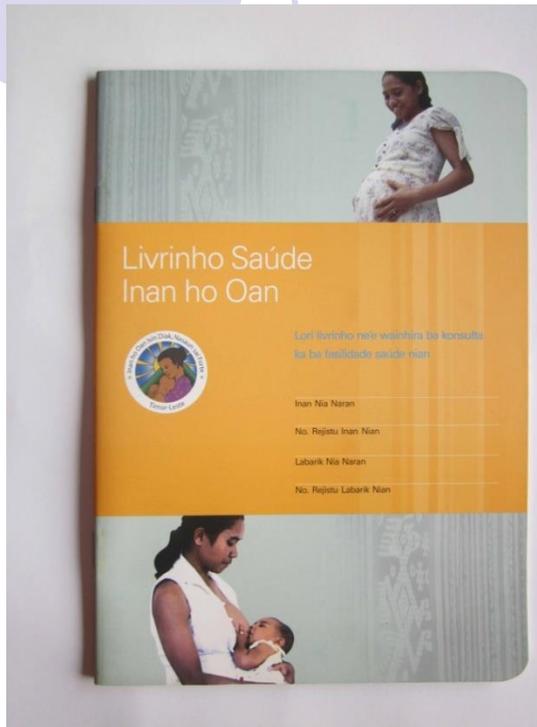
信頼のネットワークが日本の農山漁村の保健医療を支えていた。



『地域保健の原点を探る—戦後日本の事例から学ぶプライマリヘルスケア』  
中村安秀編著(杏林書院)

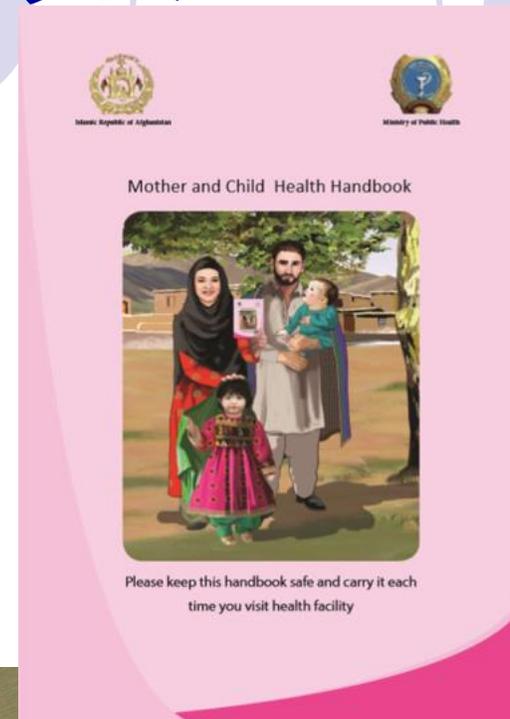
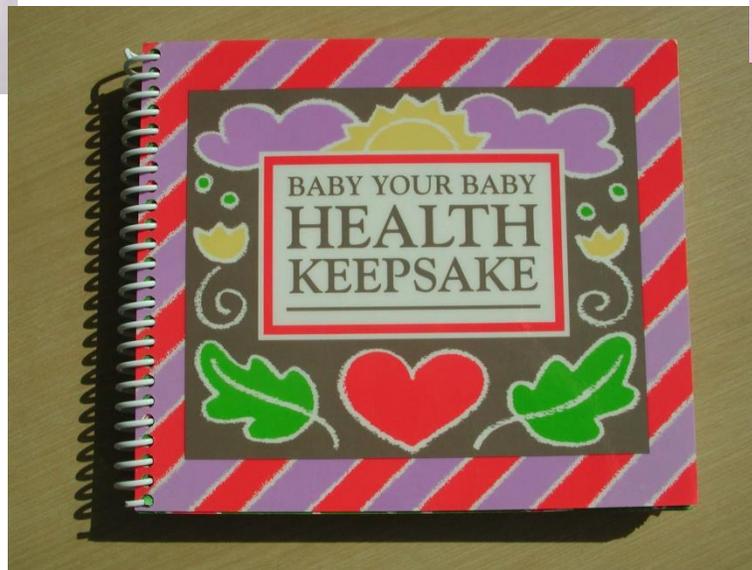
中村安秀、石川信克、佐藤 寛、坂本真理子、大石和代. 戦後の日本の経験を国際協力に活用する. 公衆衛生, 2005; 69(7): 561-568

# 世界の母子健康手帳はカラフル



**東ティモール**  
21世紀はじめに独立。  
ユニセフの協力で母子  
手帳を作成。改訂版は  
カラー印刷で100ページ。  
山岳地帯の保健センター  
でも活用されていた。

**ユタ州**  
(アメリカ合衆国)  
Baby your baby プログラム。  
子どもへの贈り物(keepsake)  
としてのアルバム形式の重厚  
な母子手帳。



**アフガニスタン**  
保健省副大臣が日本の  
乳児健診の現場を視察。  
女性のいのちを守る母子  
手帳に大きな期待を寄せ  
ていた。

# インドネシアの母子手帳は10年かけて 全国に広がった(1994年—2004年)

母子手帳を使って母親  
学級を行う助産師。

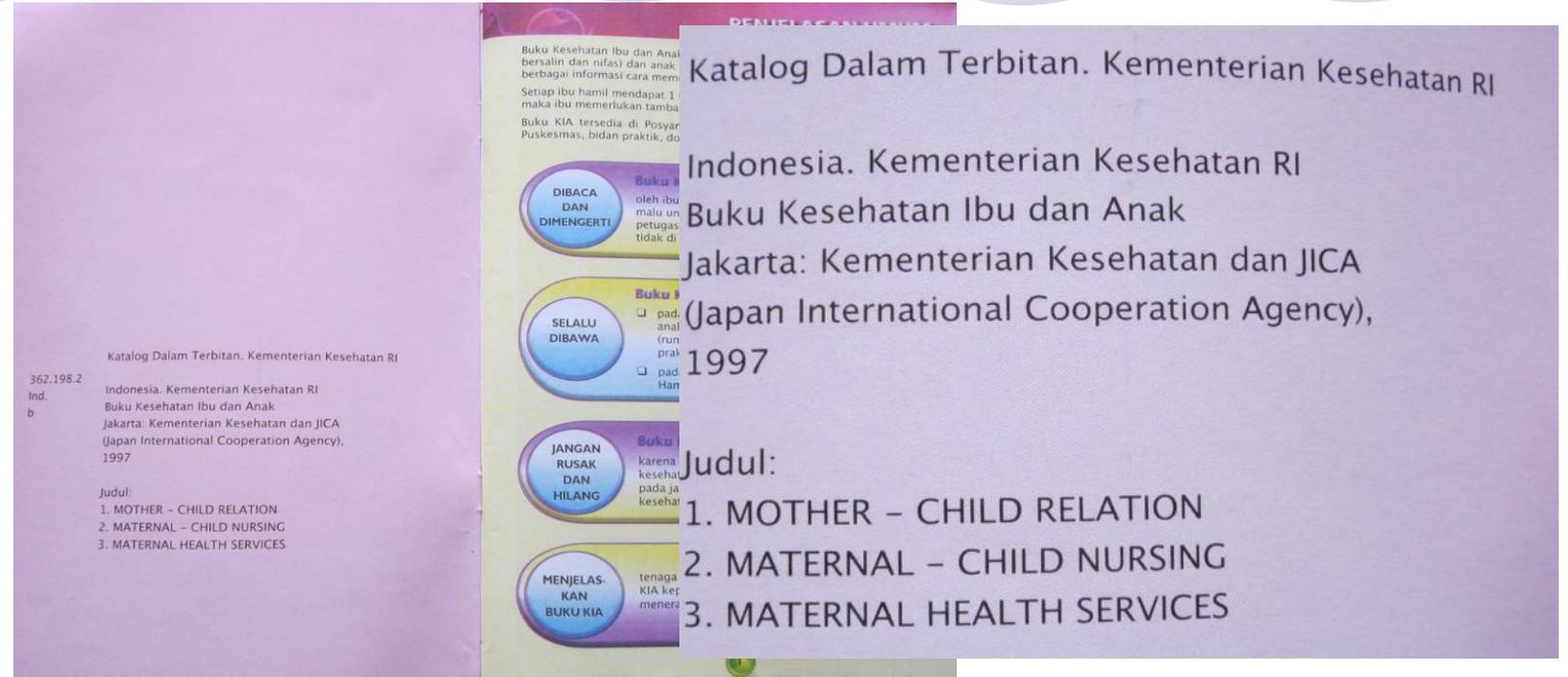


インドネシアのすべての妊産婦と  
子どもは母子健康手帳を配布さ  
れるべきである。

母子保健サービスにおいて母子  
手帳を活用する。

(保健大臣令:2004年)

# いつまでも日本との協力を忘れない！



インドネシアの母子手帳の裏表紙には、「母子手帳：インドネシア保健省とJICA、1997年」という文言が刻まれ、日本の国際協力の成果として最初に作られたことが明記されている。

# 母子健康手帳の開発と普及に関するWMA声明

世界医師会(WMA)レイキャビク総会(2018年10月)で採択  
(当時の世界医師会会長は、横倉義武日本医師会名誉会長)

## だれひとり取り残さない

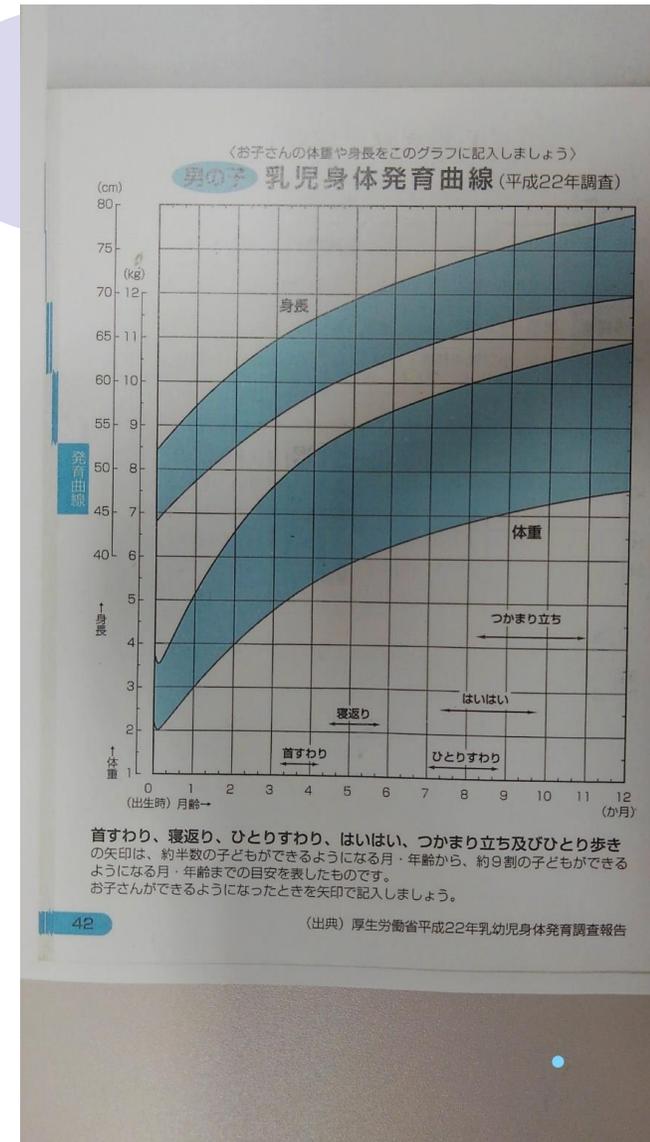
WMAは、医師会と医療専門職が、「母子手帳またはそれと同等のもの(以下、母子手帳)」を利用するように勧告する。SDGsにあるように、誰一人取り残されないよう、特に非識字者、移民家族、難民、少数民族、行政サービスが十分届かない人々や遠隔地の人々のためにもこの手帳や同等のものが使われるべきである。

## プライバシー保護

母子手帳は、母、新生児、および子どもの健康と福祉を向上させるためにのみ使用されるべき。学校の入学手続きの際に使用すべきではない。

だれひとり取り残さない  
母子保健が  
本当に実現している  
のだろうか？

母子健康手帳の体重発育曲線  
の目盛りは1kgから始まる：超低  
出生体重児の母親は既存の母  
子手帳を見るとせつないという。  
2018年静岡県は「リトルベビー  
ハンドブック」を開発した。



# タイの母子手帳の デジタル化



80ページのすべてがカラー印刷。タイで子どもを産むと決意した女性に贈る冊子に、労力と資金は惜しまない。最後のページには、QRコード。ダウンロードすれば、動画で妊婦健診や性感染症の予防などの情報が得られる。

# 二刀流のすすめ (WHY NOT BOTH?)

紙の母子手帳	デジタル母子手帳
<ul style="list-style-type: none"><li>・妊娠したらだれでももらえる。</li><li>・家庭で保管できる。</li><li>・母と子の医療記録を自分で管理できる</li></ul>	
<ul style="list-style-type: none"><li>・家族みんながみることができ、書き込むことができる</li><li>・成人した子どもに直接手渡すことができる</li><li>・60年以上も大切に保管され、親が死亡しても残る(貴重な遺品として残された日本の経験)</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・破損、紛失したときもデータの複製ができる</li><li>・最新の健康情報に上書きすることができる</li><li>・映像や音声を使うことにより、特別のニーズのある母や子どもに情報伝達できる</li></ul>

# 世界の母子手帳からおしえられたこと

## 1. 子どものための母子手帳。

小中学校、高校、大学などで健康教材として活用  
わかりやすいイラストや写真を増やす

## 2. アナログとデジタルの併用

災害時のリスクの軽減、セイフティ・ネットになる  
「だれひとり取り残されない」バリアフリー母子手帳  
オンライン・オフラインの組み合わせで効率も高まる

## 3 母子手帳の編集と活用に積極的に取り組む

子どもを産もうと決意した女性への行政からの贈りもの  
女性の意見をより積極的に取り入れる



# 本日の流れ

1. インドネシアの村で教えられたこと
2. プライマリヘルスケアの魅力
3. 世界に広がる母子健康手帳から学ぶ
4. プラネタリーヘルスをめざして  
(個人的な思索の軌跡)

# わたしたちの世界を変革する 持続可能な開発のための2030 アジェンダ

Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development

2015年9月 第70回国連総会

## 理念

だれひとり取り残さ「れ」ない (No one left behind)

- ・17の「持続可能な開発目標 (SDGs)」
- ・169の具体的なターゲットを設定

国連の新型コロナウイルス危機への対応

「健康危機ではなく、人間の危機であり、  
雇用の危機であり、人道の危機」

(グテーレス国連事務総長)

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS  
17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD



# 「わたしたちの世界を変革する」 意気込みはいつのまにか消えてしまった！

As we embark on this great collective journey,  
we pledge that no one will be left behind.

And we will endeavour to reach the furthest  
behind first.

この偉大な共同の旅に乗り出すにあたり、我々  
は誰も取り残されないことを誓う。

そして我々は、最も遅れているところに第一に  
手を伸ばすべく努力する。(外務省仮訳)



UNITED NATIONS

TRANSFORMING OUR WORLD:



THE 2030 AGENDA FOR  
SUSTAINABLE DEVELOPMENT

# 災害時においても、医療は文化である

## 東日本大震災において海外から 過去最大規模の支援

- ・20数カ国1,000人以上の援助隊
- ・外国人医師の被災地における医療行為が、特例として認められた
- ・医療支援希望した30数か国のうち、4か国が日本で活動できた

## イスラエル国防軍の医療チーム

- ・完全に自立した野戦病院  
6棟のプレハブ診療棟(内科、産科、小児科など)と60名のスタッフ
- ・医療通訳サービスを提供するために、ヘブライ語、英語、日本語ができる通訳士が常駐

緊急支援時に、外国人の医師派遣だけでは不十分。医療行為を行うためには医療通訳士の存在が必要不可欠。

医療コーディネーターの存在が重要。



**イスラエル医療チーム**  
(宮城県南三陸町ベイサイドアリーナ)  
東日本大震災において、最大規模の医療チーム。その規模と自立性は、日本の他の医療チームを凌駕していた。

# ポスト・コロナ時代の日本の医療への処方箋

## 1. 医学部から独立した「公衆衛生大学院」

- ・真の意味で文理融合した学際的なアカデミック環境
- ・「Health Policy (医療政策学)」の人材育成が必要

## 2. 保健所・市町村保健センターの人材の増強

- ・公衆衛生マインドをもつ医師の育成
- ・保健師・助産師の大量の雇用

## 3. セイフティ・ネットとしての災害に強い公衆医療体制

- ・災害・感染対応できる地域医療機関への財政支援
- ・国民皆保険制度で、予防・健康増進もカバーすべき
- ・教育と医療は近視眼的効率・効果をめざさない

# 「サイロを壊せ！」

『サイロ・エフェクト：高度専門化社会の罨』  
(ジリアン・テット)文藝春秋

**ポスト・コロナ時代を見据えた学際的なアプローチが必要**

巨大組織(役所や企業など)が陥りやすい「縦割り化」「タコツボ化」を避けるだけではない。

COVID-19の対策においても、単に「社会経済活動と感染拡大防止対策」の両立だけではまったく不十分。社会学、教育学、人類学など旧来の学問の枠を超えた発想が必要(学際：Cross-disciplinary)。

**医師・看護師・専門家だけでは、健康は守れない！**

医師・看護師などが専門職としての矜持を維持し、社会的共通資本としての保健医療を推進するには、保健医療職以外の人との棲み分けと協働が必要である。

# Planetary Health (プラネタリー・ヘルス)

## ポスト・コロナ時代の保健医療のあり方

### 1. COVID-19がどう人類と共存するか？

- ・ヒトは、多くの細菌、ウイルス、寄生虫、昆虫などと共存してきた

### 2. ワン・ヘルス (One Health)

- ・「家畜がくれた死の贈り物」人類が集団で暮らし家畜が近くにいる環境  
『銃・病原菌・鉄』（ジャレド・ダイヤモンド）（草思社：1997年）
- ・人獣共通感染症（Zoonosis）  
ウイルスや細菌が動物（家畜、野生動物）と人類の双方に感染する

### 3. プラネタリー・ヘルス (Planetary Health : 地球健康)

- ・単なる環境問題の解決だけではない
- ・地球という惑星としての健康（Planetary Health）に思いを馳せる
- ・「人間の暮らしは自然の恵みのうえに成り立っている」  
（鎮守の森、里山、入会地など）



# Planetary Health: a new science for exceptional action

## プラネタリーヘルス:規格外活動に向かう新しい科学

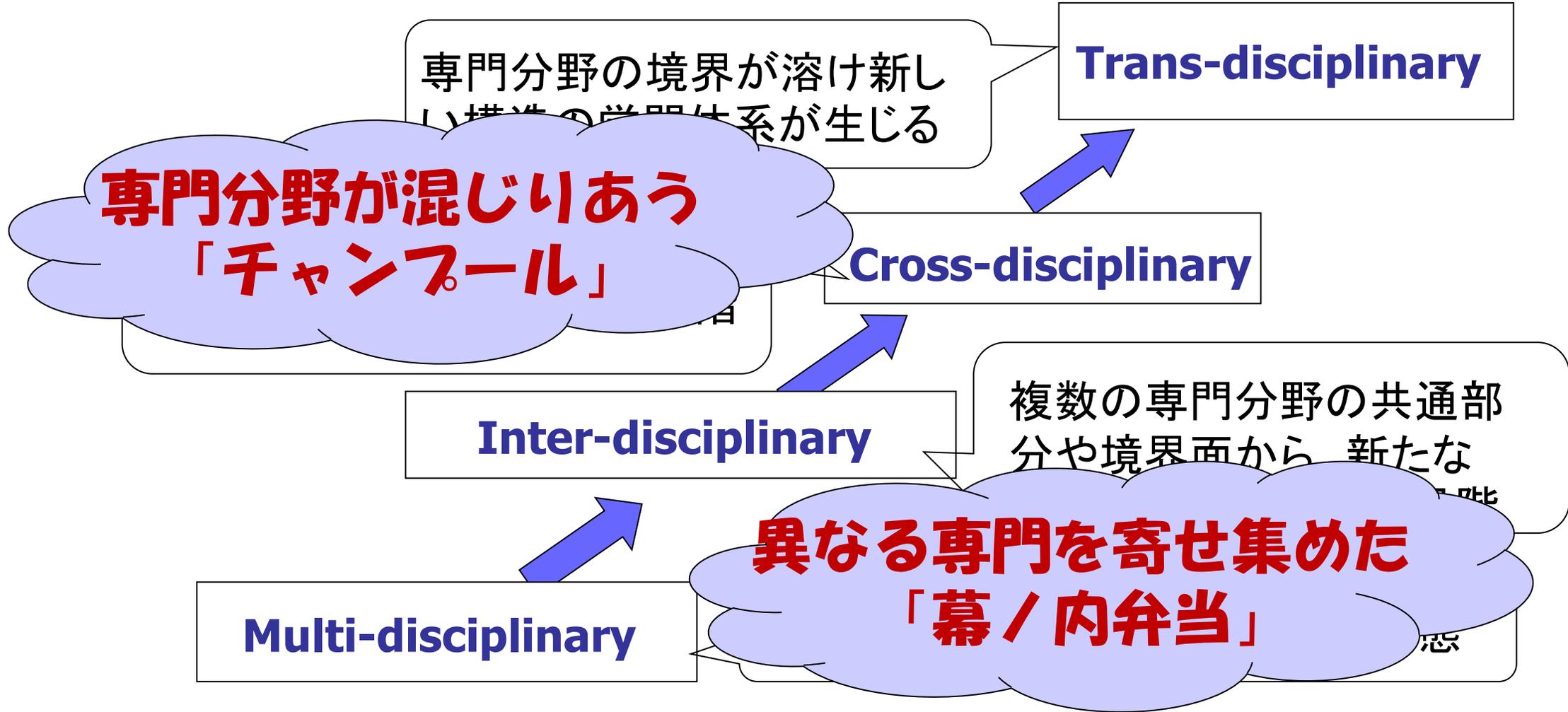
Horton R.: Planetary health: a new science for exceptional action. the Lancet 386 :1921-22, 2015

ウェンデル・ベリー (Wendell Berry: 1934年生まれ)

農業者、詩人、哲学者: アメリカ合衆国

「わたしたちは、自分にとって良いことが世界にとってもいいのだという前提で生きてきた。私たちはまちがっていた。生き方を変えなければならない、仮定を逆転させてみる。世界にとって良いことは、私たちにとってもいいことなのだ。」

# さまざまな「学際」のかたち



# 公益社団法人 日本WHO協会

## 1. 関西グローバルヘルスの集い

2020年5月より、オンライン・セミナー実施。

「SDGsとCOVID-19」

「ポスト・コロナ時代の保健医療」

背景・年齢・さまざまの方々が運営に参加

## 2. 『目で見えるWHO』

安田直史編集長。編集委員募集中。

## 3. WHOインターン支援

赴任前にひとり10万円サポート。

## 4. 国際保健E-learning 教材の作成

視聴覚教材(写真やビデオ)を多用した

E-learning教材をシリーズで製作する

将来は多言語版の作成も念頭に入れる



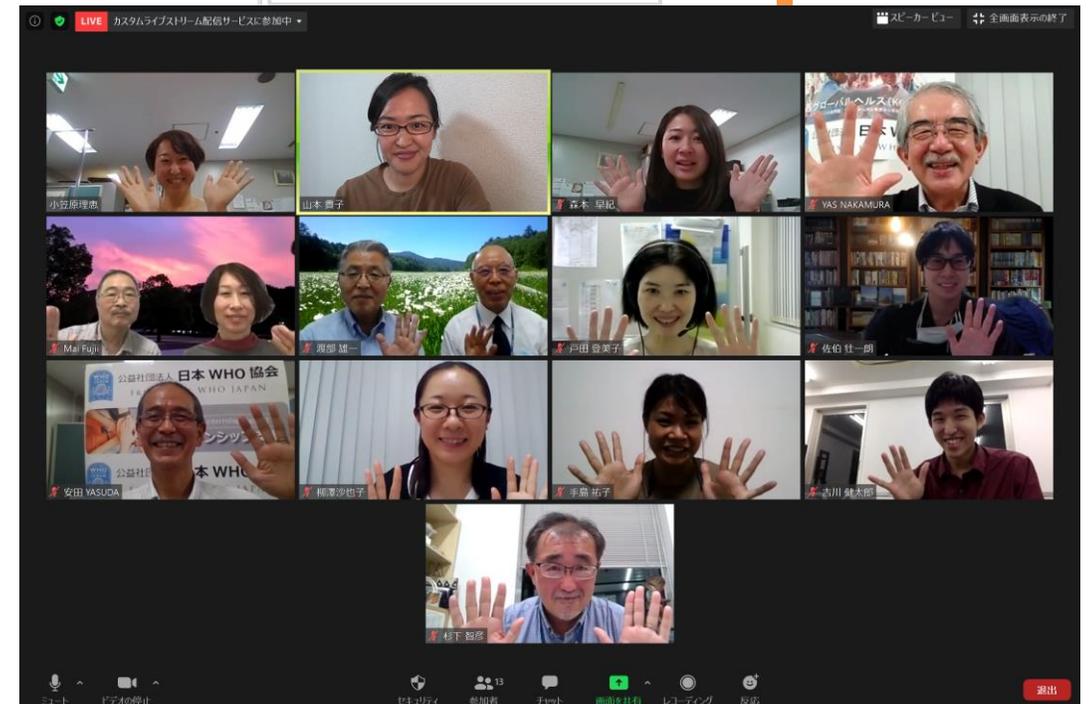
日本WHO協会・生産技術振興協会ジョイント  
関西グローバルヘルス(KGH)の集い  
オンラインセミナー第2弾(3回シリーズ)

**第3回(第13回KGHの集い)**  
**健康ってなあに? :**  
**ヘルスとウェルビーイングの原点を探る**

日時  
2020年11月11日(水)19:00~20:30  
オンライン開催(YouTubeストリーム配信)

内容

- 等身大のくわたしからみたヘルスとウェルビーイング  
篠谷 晋一郎 氏(東京大学先端科学技術研究センター)
- 医療人類学からみたヘルスとウェルビーイング  
池田 光徳 氏(大阪大学COデザインセンター)
- ミニ・パネルディスカッション  
ファシリテーター:中村 安秀 氏(日本WHO協会、甲南女子大学)



ご清聴ありがとうございました！



**コロナ感染のなか、世界中で子どもの健康を守る活動が続いている  
世界の子どもが自分の母子手帳を手にする日まで！  
中村安秀 (nakamuraya@konan-wu.ac.jp)**